

古代語上一段活用の研究

岡村弘樹

本論文は、古代における上一段活用の形態、及び上一段活用と他の活用との関わりについて論ずるものである。

上一段活用は、下一段活用が成立するまでは母音変化を伴わない唯一の活用であり、古代にはその所属動詞が十語あまりしか見られないなど、特徴的な活用である。しかし、その語数の少なさのためか、あるいはその特殊さが扱いにくいいためか、未解決の問題が多く残されている。本論文はその解決に資する議論を展開することを目指すものである。

本論文は二部より成る。

第Ⅰ部では上一段活用の形態について考察する。第一章では上代における動詞ミル（見）の終止形の形態を検討し、その結果を承けて第二章では古代における上一段活用全体を扱う。第三章では上一段活用と関係するかもしれない動詞としてホル（欲）を取り上げる。

第Ⅱ部では上一段活用と関係の深い他の活用について検討する。第一章では主に下一段活用を、第二章では主に上二段活用を取り上げる。

第Ⅰ部「古代における上一段活用の形態」

第一章「ミル（見）の形態」は動詞ミルの終止形の形態を取り上げるものであり、本論文の中心となるものである。上代において、終止形接続の助動詞ベシやラムが動詞ミルに下接すると、ミルベシやミルラムではなくミベシやミラムといった形態を取ることが知られている。このときのミという形態に関する解釈については諸説あるが、動詞ミルが上代において最も頻用された動詞の一つであるにもかかわらずミルという語形の終止形が上代に一例も見られないことから、ベシやラムが下接したミという語形こそが上代における動詞ミルの終止形であると主張した。

終止形といっても、終止形接続の助動詞という下接法からみた場合に、ミという語形に下接しているのに過ぎないという可能性も考えられる。相対的に所属動詞が少ない上一段活用の特徴とも見なし得るからである。しかしながら、終止形に下接する助詞トモが下接したミトモという例が複数見られること、さらに訓みに諸説ある『万葉集』二五七五番歌の第二句「君乎見常衣」の解釈において終止法の終止形ミを想定してキミヲミトコソと訓む方がより整合的な解釈になることから、助動詞の下接法ともあわせて、体系的に終止法の終止形もミという語形であったと考えられる。なお、一般的には命令形ミが使われていると解釈される二七番歌の第五句「良人四来三」についても、終止形ミが用いられている可能性を考える必要があることを指摘した。

第二章「上一段動詞の分類」では、古代における上一段動詞全体を扱う。上一段動詞には元から上一段活用であった動詞と上二段活用由来の動詞とが混在しているといわれるため、前者を第一種上一段動詞、後者を第二種上一段動詞と呼び分けてそれぞれに分類する

ことを目指した。上一段動詞と上二段動詞を比較すると、形態上二点の相違点が指摘できる。一点目は、上一段動詞の終止形末尾はイ段音であるが上二段動詞の終止形末尾はウ段音であること、二点目は、上一段活用からの派生語は接尾辞直前がイ段音やエ段音（甲類）となるが上二段活用からの派生語は接尾辞直前がウ段音やオ段音（乙類）になりやすいことである。以上二点の相違点に基づき分類した結果、古代における上一段動詞は以下のよう

(イ) 第一種上一段動詞

キル（着）・ニル（煮）・ミル（見）・イル（射）・イサチル（泣）

(ロ) 第二種上一段動詞

ニル（似）・ヒル（干）・ヒル（嘆）・ヒル（簸）・ミル（廻）・キル（居）・アラビル（荒）

(ハ) いずれに分類するか不明な上一段動詞

イル（鑄）・イル（沃）・キル（率）

中でも、ニル（煮）の終止形ニと見られる用例が『新訳華嚴經音義私記』と享和本以外の『新撰字鏡』諸本に見られるという指摘と、ニル（似）と四段動詞ノル（似）の派生関係を考えるにあたって共通の派生元となる上二段動詞ヌが想定されるという主張は、先行研究に見られないものである。また、ニという語形のニル（煮）の終止形が見出されたことにより、第一章で考察した内容が動詞ミル（見）に留まるものではなく、第一種上一段動詞全体に当てはめられるものであることを確認した。

第三章「ホル（欲）の活用」は、四段活用と考えるには不自然な例が多いホルの活用を検討したものである。ホルは『日本書紀』歌謡では連体形ホルという例が見られるが、『万葉集』ではホリという形態のみが見られる。このホリは一見すると連用形かと思われるが、引用の助詞トを下接したホリト、和歌の末尾に置かれるホリ、活用語の連体形や已然形に下接する助詞カモを下接したホリカモといった独自の用例が見られ、これらのホリは四段動詞の連用形の用例とは考えがたい。

ホルは『万葉集』編纂時の奈良時代後期には既に歌謡や和歌において用いられる動詞になっていたと見られ、むしろ前時代的な古態を留めていると見た方が良い。そこで、第一章、第二章で検討してきた上一段活用の形態よりもう一段階古い上一段活用の形態を考え、かつてはいずれの活用形においても語尾にルやレを伴わず-i という形態であったと想定した。動詞ホルの活用を古い形態の上一段活用と考えれば、ホルの独自の用法についても説明を加えることができる。

一般的に上一段活用には単音節動詞しか属しないとされるが、ホルの活用が上一段活用であったと認められるならば、かつて上一段活用には多音節動詞も属していたということになる。しかし多音節の語幹を持つ上一段動詞は、語幹の末尾が活用語尾と認識されるようになり、四段活用や上二段活用に転じることがある。そのために古代における上一段動詞は単音節動詞ばかりであったという可能性が考えられる。

第Ⅱ部「上一段活用の周辺」

第一章「二段活用の一段化」開始時期と下一段活用の成立」では、オク（起、上二段）→オキル（上一段）やウク（受、下二段）→ウケル（下一段）のような「二段活用の一段化」の現象は単音節動詞から始まったことが知られるが、上二段活用の一段化と下二段活用の一段化とでその開始時期が数百年隔たっている原因について検討した。

「二段活用の一段化」とは、二段活用が一段活用と同じ形態になる現象であると一般的には認識されている。しかし、第Ⅰ部で検討したように上代における上一段活用の終止形末尾がイ段音であったと考えると、上二段活用が一段化する際に終止形がいかなる形態を取ったかが問題となる。終止形末尾がイ段音である動詞は上一段動詞とラ変動詞に限られ、動詞の多くの終止形末尾はウ段音であった。上二段動詞についても同様であるが、元々ウ段音で終止していた動詞が、一段化による語幹の安定を優先させてイ段音での終止に転じたとは考えがたい。終止形の形態は既存の上一段動詞と異なる-iルという形態を取っただろう。単音節上二段動詞の一段化とは、全ての活用形において語幹がイ段音で安定している既存の上一段活用を契機としつつも、終止形が-iルという形態である新生の上一段活用を創り出した文法現象であったと考えられる。

一方、既存の上一段活用と対になるような形態の下一段活用、すなわち終止形末尾がエ段音である下一段活用というのは存在しなかった。それは、文の末尾というのはイ段音かウ段音で結ばれるのが通常であり、エ段音での終止というのは何らかの意味をもつ有標なものであると認識されたためであろう。上一段活用の一段化が開始される際には既存の上一段活用がその契機となったが、既存の下一段活用と呼び得るような下一段活用は存在しなかったため、単音節下二段動詞には一段化の契機となる活用がなかった。そのために下二段活用の一段化は上二段活用と同時期には開始されなかったのである。平安時代初期に単音節上二段活用の一段化が完了し、既存の上一段活用も新生の上一段活用に合流し、新生の上一段活用の使用頻度、所属語数ともにある程度充実して初めて、そこからの類推により単音節下二段動詞の一段化は開始されたのだろう。

第二章「上二段活用と他活用との関わり」では、上一段活用と関係の深い上二段活用について、他活用との関わりを中心に検討した。

本章ではまず、上代における自他対応形式を取り扱った。釘貫亨『古代日本語の形態変化』（1996）によると、自他対応形式は第Ⅰ群：ウク（浮、四段自動詞）—ウケル（下二段他動詞）のような活用の種類による自他対応、第Ⅱ群：ナル（成、自動詞）—ナス（他動詞）のような語尾による自他対応、第Ⅲ群：アル（荒、自動詞）—アラス（他動詞）のような語幹の増加と語尾付接による自他派生の三種類に分けられる。これを活用という観点から一貫して観察すると、第Ⅰ群は専ら四段動詞の下二段化により自動詞／他動詞を派生した形式、第Ⅱ群はル語尾四段動詞とス語尾四段動詞の組に偏る形式、第Ⅲ群は上・下二段動詞に語尾ル／ス（いずれも四段活用）を付加した組に偏る形式と捉え直すことができる。特に第Ⅰ群形式と第Ⅲ群形式は、四段→下二段、上・下二段→四段という対となる形式であるといえよう。

ところが、上二段動詞はそのほとんどが自動詞であるといわれるが、そうした特徴を持つにもかかわらず自他対応形式にはほとんど関わっていない。この点については、四段動

詞連用形と上二段動詞連用形の形態が関係していると見られる。動詞において連用形は最も頻用される活用形であり、活用の違いで自他の違いを表すにはまず連用形の形態が明確に異なることが重要であったろう。しかし四段動詞連用形と上二段動詞連用形は、上代特殊仮名遣いの甲乙の違いがあったものの、その両者による掛詞が成立した例が見られるほどに類似した音であった。そのために四段→上二段という自動詞派生は成立せず、上二段動詞は自他対応形式にあまり関わることができなかつたのだと考えられる。

続いて、中古以降において上二段活用と四段活用との間で揺れが見られる動詞を取り上げた。活用に揺れが見られる動詞の中にはバ行動詞が多い、上二段動詞の自動詞的意味に基づく活用の出入りが見られるといった先行研究の指摘があるが、その他に四段活用の中で最も多いラ行動詞の例が少なく、一方で四段活用の中で最も少ないタ行動詞の例が多いことが指摘できる。上二段動詞の意味を損なわない範囲という条件に加え、上二段動詞らしい語尾（バ行）や四段動詞らしくない語尾（タ行）が活用の揺れに関わりやすかつたらしい。

また、この語尾に見られる傾向は、鎌倉時代から室町時代にかけて新しく造られた上二段動詞にも見られる。上二段動詞は四段動詞や下二段動詞と比べて語数が少ないため、新たに造られる動詞のほとんどが四段活用か下二段活用であるが、中世にはわずかに新たに造られた上二段動詞が見られる。新しい上二段動詞のほとんどは元々上二段動詞に突出して多いバ行動詞であるが、それを除くと、イコヅ、コヅ、シビツ、シヤツの四語に限られる。ダ行動詞は四段活用にはないためイコヅとコヅは上二段動詞として成立したと考えられ、シビツとシヤツは、四段活用にタ行動詞が少なく、かついずれの動詞も上二段活用の自動詞的性格に合致するものであつたために上二段動詞として成立したのだと考えられる。